

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	本多満教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Mitsuru Honda
作成者（著者）	鈴木, 銀河
公開者	東邦大学医学会
発行日	2024.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 71(2). p.58-58.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLCOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2023_073
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD19301121">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD19301121</a>

# 本多 満教授送別の辞

鈴木 銀河

東邦大学医学部総合診療・救急医学講座

この度、本多満教授がご定年、ご退任されるにあたり、心からお祝いと感謝の意を申し上げます。

本多先生は昭和58年に本学医学部を卒業され、大森病院で医師としてのキャリアをスタートなさいました。済生会横浜市南部病院脳神経外科医員、本学医学部脳神経外科学講座助手を経て、救命救急センターと脳神経外科の両方で勤務されながら、平成10年に改めて救命救急センター所属となりました。平成14年に救命救急センターの副部長に就任され、平成15年に設立された総合診療・救急医学講座救命救急センターに、翌16年、講師として就任されました。その後、平成20年に准教授、平成24年には救命救急センターのセンター長に就任、平成31年に教授に昇任されました。また、救急・災害統括部の部長、集中治療部部長、呼吸ケアチーム部長も兼務なさいました。

脳神経外科医時代の本多先生については、手術の腕はもちろんのこと、診療についても丁寧で確実、後輩医師たちからの信頼も厚かったと伺っております。救命救急センターに所属なさってからは、ご自身で手術をされた患者を現在に至るまで継続して外来でフォローアップされてきました。そのご様子からも、いかに患者を大切に思いながら診療にあたられてきたかをうかがい知ることができます。そして、大田区唯一の3次救急医療施設の責任者として、臨床の現場で地域への多大なる貢献されました。研究面では脳神経外科医としてのキャリアを活かし、重症頭部外傷や低体温療法中の脳循環をメインテーマとしていらっしゃいました。当時誰も実行したことのない、画期的な方法を用いて重症頭部外傷の脳循環に迫り、数々の臨床的疑問点を明らかにすることで脳神経外科学、集中治療医学の進展にも大いに貢献されています。また、若手医師や学生の教育にも熱心で、授業や実習の指導にとどまらず、ICLS講習会を長きに渡り開催されてきました。ICLS講習会は本原稿

執筆時点で125回を数えます。本学での活動以外にも、羽田空港との連携で災害を想定した訓練を行い大規模災害に備えていらっしゃいます。万が一、空港で大規模な災害が起こった際には医療班の指揮をとられます。その他、日本救急医学会評議員および日本集中治療医学会評議員、日本臨床救急医学会評議員、日本救急医学会関東地方会幹事、日本外傷学会評議員、日本神経救急医学会では評議員、理事と数多くの公的委員も務められました。さらに日本救急医学会では長きにわたる救急医療へのご貢献が認められ功労会員に選出されました。

個人的な思い出になりますが、私は本多先生が救命救急センター長に就任されてから初めての入局員であり、その事実が現在もこれからも私の誇りであり続けると確信しております。入局時から本多先生の懐の深さで、新米救急医時代の私はとてもかわいがっていただきました。2021年に私が医局長を拝命してからは、それまでよりも本多先生とお話する機会が増え、たくさんの相談に乗っていただきました。シフト制勤務の導入、多職種連携の強化など、本当に数多くの計画を本多先生と一緒に実現できたことは、私にとって何事にも代えがたい経験であり一生の財産であります。若輩者の私の意見にも真剣に耳を傾けて下さり、いつも正しい道へ導いてくださいました。

いつも穏やかで、余裕が感じられる先生の存在感は私たちに大きな安心感を与えてくださいました。そしてこれからも我々を温かく見守って下さると信じています。長きにわたるご指導とご貢献に、我々救命救急センタースタッフのみならず東邦大学教職員一同、心より感謝申し上げます。そして、これからも変わらぬご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。最後に、先生のご健康を心より祈念致しております。